〔論　文〕

家族経営の源流

－舜地三郎氏の生活史より－

The Origin of the Owner's Familism:
The Life History of Saburo Shoochi

坂口桂子
Sakaguchi Keiko

はじめに

舜地三郎氏は、社会福祉法人しいのみ学園の園長である。しいのみ学園は福岡市にある知的障害者福祉施設で、1954（昭和29）年、舜地氏が48歳のときに妻の露子さんと力を合わせて設立した。しいのみ学園は1954年４月８日、精神薄弱児施設として福岡県および厚生省の認可を受けて設立され、児童12名、職員８名でスタートした。翌年５月には共同募金182万円が交付され、３教室１棟が増築された。ところが、法を守らず教育類似行為をしているという理由から、設立２年目の1956（昭和31）年３月には認可取消となり、共同募金182万円は没収されたため、しいのみ学園は養護学校の形態をとり、無認可のまま継続経営をおこなった。設立当時は、全国に養護学校が一校もなかったが、1979（昭和54）年４月から養護学校の就学義務制が実施されることになり、しいのみ学園で学校教育をすることができなくなった。そこで、1978（昭和53）年４月に厚生省法人認可を受けて、３歳から就学前までの児童が通う知的障害者通園施設として社会福祉法人しいのみ学園が誕生し、今日にいたっている。社会福祉法人化した1978年、児童30名と職員14名でスタートし、2005年現在では児童30名と職員17名で構成されている。学園で働く人々は時代とともに移り変わってきたとはいえ、舜地夫妻を中心に息子・娘・娘婿・親戚や職員が、園児と家族的な雰囲気で学園を運営してきた。そこで本稿では、舜地氏のしいのみ学園にみられる家族経営の原点をさぐるために、舜地氏の幼少期から青年期までの家族関係について考察していく。

１．家族経営としいのみ学園

まず家族経営とは何かについて概念を整理し、事例として、しいのみ学園をとりあげ、家族経営の特徴がどのような取り組みからうかがえるのか、みていくことにしよう。

(1)　家族経営

家族経営の概念を整理するにあたり、まず有賀喜左衛門の家概念をもとに考えていく。有賀は家を夫婦関係を根拠とする集団としてとらえている。「家は夫婦を根拠とする集団であることは他の集団ときわだった特色を持つ」（有賀 1952＝2000：266）としている。さらに続けて

「ところが家と認められている集団でも夫婦関係を欠くものがあり、その一方が欠けたり、未婚者のみを含むものもある。それでも法律的にも慣習でも、これを家と認めている。しかしこれらは過去に夫婦関係があったか、将来それを持つべき過渡的形態かである。だから夫婦関係の成立する可能性がなくなると家として認めにくくなるといってよい」(同書：266)。夫婦の一方が死別か離婚している状態、あるいは将来結婚する予定の未婚者、なども含めて、家と位置づけている。

しいのみ学園は、舟地三郎氏と妻・露子さんとで1954年に設立し、運営してきた。1978年に社会福祉法人化されてからは、露子さんは学園運営の一線からは退いたが、1997（平成９）年に82歳で亡くなられるまで、学園の子どもたちを、わが子のように思い育ててきた。現在、舟地氏は妻と死別しているが、夫婦であったという点で、また今日のしいのみ学園の基礎を舟地夫妻が築いたという点で、有賀のいう家の特色をもっている。

さらに有賀は、家は夫婦関係が中心となるということから、家の非血縁性を説いている。「父母と子供の間は血縁関係であるが、夫婦関係はそうでないものの方が多い。近親結婚を忌避する風習すら一般的である。それゆえ家を血縁集団と定義することはできないが、子供のない夫婦関係の場合にも家は存在できる」(有賀 1952＝2000：265)。そして、家を維持するために、そこで雇われている人たちなども家族と見るという説を提示している。「家は夫婦生活が中心となるので、血縁者が含まれても含まれてなくても、成立するばかりでなく、非血縁者が含まれても成立する。家の生活を維持するために必要なら、外部から人をとり入れて家の成員として包摂しなくてはならぬ。これを家族として認めるかどうかを法律や慣習で規定することは多いが、社会学的には現実の家生活を構成する集団として捉えねばならぬ。そして家生活をその内部で支持する人々を家族と見る。彼らが中心となる夫婦とどんな社会関係を持つとしても、その社会関係の異なるままに一つの家生活に含まれ、その内部でその生活に参加するものを家族ときめてよい」(同書：266 - 267)。非血縁者で、雇用関係にある人も、家族とみなす考え方である。本稿での家族経営は、この有賀説にもとづいて、家生活を維持するために、家生活をその内部で支持する人々を家族ととらえ、その人々によって運営されている経営体を、家族経営と定義づける。

ところで、家制度の廃止により、戦後は家概念をどのように使うのかが問題となるが、小規模経営体および個人経営などでは、家概念が現代社会においても適用可能である。北川隆吉は、有賀の家理論の現代的有効性の射程範囲を、農家だけでなく、零細企業、家族労働力でやっている工場など自営業にまでのばしている（北川 2000：256 - 257)。一方で、三戸公は現代の大企業についても、家の論理で説明できるとしている。三戸の言う家と有賀の家とを比較し、個人経営や社会福祉法人、株式会社など経営形態の違いにかかわりなく、家概念を使用できるかどうか検討が必要であるが、本稿では、有賀説にもとづいて家族経営の定義をおこなう。

(2) 園長と家族経営

しいのみ学園は、2005年現在、園長を含め17名の職員で構成されているが、次にみるように、職員同士が家族的な関係で、また職員と子どもたちが家族的な関係で成り立っている。たとえば、父親役として男性教員を各クラス一人ずつ配置している。「３・４・５歳の年齢別に分かれ、１クラス10人の子どもたちに、先生が３人つきます。先生３人のうち１人は男の先生です。家庭にお父さんがいることを考え、学園でお父さん役を果たすのが狙いです」(舟地 2004：

175 - 176)。また、教職員全員で教材を手作りしていることが、家族的な雰囲気をつくりだしている。「近くのスーパーから段ボール箱、カメラ屋さんから空ケースをもらい、燃えないゴミ集め場からジュースの缶などを拾ってきました。色を塗り、中にパチンコ玉を入れて音を出したり、トイレットペーパーの紙しんをつないで蛇をつくったり……。身の回りにある廃品を教材にして、投げてもよい、壊れてもいい、玩具をつくったのです。(中略) 教える先生だけでなく、事務長も栄養士、運転士、用務員も、もちろん園長も、毎月１個ずつ作ります」(同書：180 - 182)。

このような家族的な関係が今なお続けられているのは、小規模経営を維持していることとも関連が深い。現在児童数は30名だが、これは1978年に社会福祉法人化したとき以来、ずっと変わっていないし、職員も14名から17名に少し増えたぐらいである。この小規模経営については、社会福祉法人だから規模拡大しないのか、そのあたりは今後明らかにしなくてはいけないが、少なくとも園長の昇地三郎氏は、小規模経営を評価し、小規模経営に積極的に取り組んでいる。昇地氏は平成15年の福祉法改訂について次のように批判している。「今日の日本は、福祉にアメリカの様式を持ち込んでいます。(中略) アメリカ式は経済の豊かさに任せ、800人を収容するような知的障害学園であったり、300人収容の肢体不自由学園など、大きく立派な設備をつくっています。人員配置は園児２人に先生が１人がつくような配置。園長は子どもの顔を知らない、いわゆる福祉ビジネスです。対してヨーロッパは、園児の定員が25～50人ほどの小規模経営で、建物も家族的です。日本にはアメリカ式のところと、そうではないところと２通りあります。良し悪しは別にして、世界の流れをアメリカ方式にしようという流れにほかなりません。私は『この改訂は誠にまずい改訂である』と思っています」(昇地 2005：161 - 162)。

福祉ビジネスと称されたアメリカ式では、園児２人に先生１人がつくというのは、大規模でありながら少数精鋭の対応を可能としている。しかし昇地氏は、園長が子どもの顔も知らない大規模な学園に批判的である。「小規模経営で建物も家族的」であることを選択し、小規模経営を基盤とした家族経営を、しいのみ学園で実践している。個人経営で22年間継続し、また社会福祉法人化して30年近く、小規模経営で継続してきたのは、園長・昇地三郎氏の経営理念に負うところが大きいと思われる。

(3) 家族経営の成立と存続

拙稿において、家族経営の存続条件として、①規模を拡大しない、②競争をしない、③後継者の育成、をあげた (坂口 2004)。しいのみ学園の場合、「①規模を拡大しない」のは、すでにみてきたとおりである。「②競争をしない」については、園児の数を増やしたり、クラスを増加したり、また園児募集を活発におこなうなど、同業者と競争するようなことはしていない。「③後継者の育成」は、副園長が昇地氏の娘婿であり、かれは昇地氏の教え子でもある。昇地園長が国内をはじめ海外の講演出張などで学園を不在にしている時は、園長に代わって、学園運営をまかされている。また昇地氏の娘・邦子さんも、障害児教育を受け継ぎ、言語治療士としてこれまで学園で仕事をされてきたが、2003 (平成15) 年に亡くなられた。後継者の育成は、娘や娘婿にかぎらず、現在働いている職員にもおよんでいる。職員と教育方針で議論をしたり、障害児教育のプロに職員を育てるという姿勢が、昇地園長には強くうかがえる。

このように、しいのみ学園は、先にあげた家族経営の存続条件３つを満たしていることがわかる。そこで本稿では、昇地園長の「家族経営への志向」について分析していく。「家族経営

への志向」とは、経営体を家族とみなす考え方である。さらに、小規模を維持して、規模を拡大させないのも特徴としてあげられる。なお、家族経営がなぜ長期にわたり経営が継続するのかについては、稿を改めて考えていくことにしたい。

舞地氏は幼少期から青年期をどのようにすごしたのか、またどのような家族の中で育ったのか、家族経営の原点を探ろうとするものである。今回の分析対象は、成人期に移行するまでの、誕生から広島師範学校卒業までをとりあげる。

2．軍人志望から師範学校へ

舞地三郎氏の舞地という姓は妻・露子さんの姓で、1948年42歳のときに舞地家の指定相続人となり、山本を舞地と改姓したものである。ここでは、山本三郎氏が誕生した1906（明治39）年から、広島師範学校を卒業する20歳の1926（大正15）年までをとりあげる。以下、経歴の記述は、『親心子心』1991年を増補して2004年出版された『禍を転じて福と為す』をもとにしている。なお『親心子心』は西日本新聞に聞き書きのスタイルで、88日間連載された内容をまとめたもので、自分の子どもが脳性小児麻痺になり、しいのみ学園をつくるに至った過程を書いた本である。

(1) 軍人をめざして（岩国中学校入学まで）

山本三郎氏（以下、三郎氏と記す）は1906（明治39）年８月16日に、父・山本長八、母・かよの次男として誕生した。1905年９月に日露戦争が終結して、父が日露戦争より凱旋した翌年である。「父・山本長八は日露戦争のさい、乃木第三軍に属し、二〇三高地の攻撃、３月９日の奉天戦で最左翼軍として、北陵の夜襲をかけた旭川の第七師団歩兵二十七連隊の第三中隊長として従軍しました。凱旋した後、釧路の連隊区司令部副官で第二号官舎にいた明治39年８月16日、私はいわゆる〝凱旋記念〟として生まれたのです。丙午の年でした」（舞地 2004：16-17）。「母・かよは、広島県安佐郡長束村（現広島市安佐南区長束）の生まれです。母の兄の横田啓一と私の父は、北京に出征したころ、同じ広島の歩兵十一連隊に勤務していた関係で、その妹と結婚することになりました」（同書：17）。

父は三郎氏が６歳になった４月、急に陸軍を辞め、一家が郷里・山口県に帰ってきた関係で、1913（大正２）年、山口県の上関村立祝島尋常小学校に入学した。２年生（８歳）になったとき、父は母方の兄に当たる佐竹利市（故人）が広島県加茂郡寺西村で精米機や発動機をつくっている佐竹機械製作所に勤務することになり、一家は再び引っ越しをして、兄と一緒に寺西尋常高等小学校へ転校した。この年７月28日に第一次世界大戦が起こっている。

三郎氏は、父について大変尊敬していた。「戦前の軍人の評価は現在と違って一段と高いもので、職業軍人といった言葉もなかった。小学校での三大式典の時、父が陸軍の大礼服に勲章を佩用して参列すると凛々しく、その勇姿には同級生も目を見張っていた」（舞地 1997：46）。「父に連れられて錦帯橋を渡り、山口県立岩国中学校の入学式に参列しました。そのころ岩中は軍人養成の中学として萩中と一、二を争う有名校でした。父が私をこの岩国中学校に入れたのは、親の願いをわが子に託し、私を軍人にするためだったのです」（舞地 2004：19）。中学校受験の前夜、口頭試問に備えて、何度も父から訓練されたので忘れないという言葉「原籍は山口県熊毛郡上関村大字祝島九十番地。出生地は北海道釧路國釧路陸軍官舎第二号であります」

(同書：16)。三郎氏は小学校6年生から短歌の道に入ったということで、1920（大正9）年14歳のときに詠んだ歌「新しき中学校の帽子かぶり　錦帯橋を渡る嬉しさ」(同書：290）からもわかるように、三郎氏自身も軍人になることを夢見て、希望に燃えながら中学校に通っていたことがうかがえる。

(2)　岩国中学校から師範学校へ

1911（大正10）年、三郎氏が中学2年の秋、父はわが子を自分の後継の軍人にしようと思い、そのころ神戸一中の5年に在学していた兄を陸軍士官学校、三郎氏を広島幼年学校へ受験させた。兄は見事、60人に1人の難関を突破し、陸士に合格したが、三郎氏は幼年学校に初日の身体検査で不合格となってしまった。「明治生まれの私自身、親が軍人だから当然自分は軍人になれるものだと思っていた」(舟地 2005：39)。父は私を仏壇の前に座らせ「お前は軍人になれない。仕方ない。一生子どもと暮らすか」と言って、広島師範学校の入学試験に連れて行った。この父の言葉について、三郎氏は「私の全身を突き刺すほど痛かった。私を見捨てた〝捨てゼリフ〟のように、耳に響いた」(舟地 2004：20）と言っている。「父が軍人だったため優先入学の恩典にあずかり軍人になるはずだった私」(舟地 2005：35)、親の期待にそえなかったのが情けなかったと述べている（舟地 2003：11巻 - 2)。

この師範学校への進学をすすめたことについて、その頃は軍人にならなければ小学校の先生になるのが常識だったとのこと（舟地 2005：35）だが、三郎氏は父から見捨てられた気がした。しかし、父は三郎氏を見捨てたわけではなかったようだ。失意のどん底にあった三郎氏は父に「鉄道員になりたい」と相談したところ、父は「鉄道員は月給が安い。学校の先生、中でも校長先生は将校と同じくらい月給が高いし、校長室で悠々とできる」と言った（舟地 2005：40)。父は演習で小学校の校庭にテントを張って露営をして、中隊長である父も兵士と一緒にテントに寝泊りしていたが、そのとき父が、校長室で悠々としている校長先生を見ていいなあと思ったことを、三郎氏に話していたという（舟地 2003：18巻 - 1)。

また、小学校5年生の時、弟のクラス担任の台先生といって師範学校を出たばかりのりりしい先生がおられたが、運動場の高い鉄棒で大車輪を、子どもたちの前で披露されたときに、感動して見入っているとズボンの革帯のバックルに「師」という字が浮き彫りに光っていたのを、家に帰って話すと、「師範出の先生だからだよ」と父のあがめるような言葉が印象深く、私はその先生に憧れた、という（舟地 1999：258)。この一節からも、父が師範出の先生をあがめているのを、三郎氏は子ども心に感じ取っていることがわかる。

このように、父は尊敬の念をもっていた先生への道を、三郎氏に歩ませようとした。父から見捨てられた気がした、といっているが、父は三郎氏を見捨ててはいなかったといえよう。しかしその当時の三郎氏は、父の本心を感じ取るよりも、軍人になれなかったというコンプレックスの方が強かった。これは、兄に対するコンプレックスとして強く心に刻まれることになった。三郎氏は1922（大正11）年4月、父のすすめで広島県立広島師範学校本科第一部に入学、16歳であった。

3．山本三郎氏の家族

前章では、三郎氏が軍人をめざした岩国中学校入学から、師範学校へ進んだことをとりあげ

た。軍人への道に変更を余儀なくされたことは、三郎氏のその後の人生に大きな影響をおよぼしたと考えられる。ここでは、三郎氏の幼少期から青年期にかけて、身近な存在だった父と母、兄と弟について、三郎氏がどのように語っているのかをみていくことにより、三郎氏の家族関係について考察していくことにしよう。

(1) 父

父の回想で、三郎氏は次のようにも述べている。父は「『努力することだ。普通の者と同じことをしていたのでは凡人である。秀才とか言われる者は人の2倍も3倍も努力している。人生は努力だ』こういったことをよく言っていた。父は相撲が好きで、大きい男が勝つのはあたり前であるが、小さい男が大きい男を負かすためには稽古に稽古を重ねなければならん、相撲の妙味というのは小さい者が大きい者を負かすことだ。そして人の意表をつくことだとよく言っていた」(昇地 1997：45)。「小さい者が大きい者を負かす」という言葉は、三郎氏にとって体格も大きい兄を、努力によって超すことができる、との励ましにも受け取れたのではないだろうか。三郎氏は父の影響を大きく受けており、「父は気位が高く、つまらんことをするな、というのが口ぐせでした。大きな教訓でした、これは。」とも述べている（昇地 1999：226)。

また父は、仏教の熱心な信者で、朝夕の礼拝は1日も欠かさなかった。子どもが3歳になると必ず父の後に座らせられ、父の読経をじっと聞いていなければならず、兄弟姉妹9人は年の順に父の後に座って御経を唱えた。御経を唱えなかったり、時にふざけたりすると大目玉が飛んだ（昇地 1997：48)。さらに、次のように述べている。「正直に言って、子どもにとって意味もわからぬ御経を毎日朝晩唱えることはつらかった。何とかこれから逃れる方法はないかと思って、受験期になって勉強が忙しいからといって御経にでも遅れでもしたら大きな雷が落ちて、逃げる道はなかった。仏様を拝まないで勉強したって何にもならん、――この一言であった」(同書：49)。このような父の後姿について、「父はどんなに忙しい時でも、来客があっても御経をやめたり、中断したりするようなことはなかった。御経を読む父の姿は本当に真剣であった」(同書：48) と述べている。

兄弟姉妹全員が幼少期から、父の後に座って朝晩に御経を唱えたことは、家族の絆を強めたと同時に、子どもたちの躾にも大きく影響をおよぼしたと考えられる。兄弟姉妹が成人した後の1970（昭和45）年、父が93歳で急に亡くなったときのことが次のように語られている。両親と孫（長男の遺児）の3人で住んでいたが、お通夜になり、孫の善護が導師となって、いつも父の座っていた位置に正座して御経が始まった（昇地 2004：154)。青森から福岡までばらばらになっている8人の兄弟姉妹と、孫とが誰も御経本を持っていないのに、御経を皆大きな声で唱え始めた。「息を切る所も御経の抑揚もぴったり一致している。皆力一杯心一様に御経を唱えている。父から習った調子そのままに――」(昇地 1997：50)。さらに続けて、次のように述べられている。「幼き日に習った御経は何十年後にも消えるものではない。この孫を加えて9人の子どもたちの揃った御経の唱和を今は亡き父は何と聞いていられるだろうか。皆幼き日の父の真剣な後姿を心に描きつつ心を一つにして唱和しているのである」(同書：50)。このように、兄弟姉妹がそれぞれの家庭をもった後でも、生まれ育った家族の一体感を、信心深い父の姿勢をとおして味わうことができたといえよう。

(2) 母

母の話で「自分が小学校１年生の時、広島県安佐郡の郡長試験で一番だったので、その表彰式が安村のお寺で行われ、群衆が多いので母に抱かれて表彰台に上げてもらって表彰状をもらった」（舟地 1997：46 - 47）という話を、三郎氏も兄弟姉妹も皆、聞いているということである。そこで、母は子どもたちが通信簿を持って帰ってきても、「おまえたちが勉強ができないはずはない」と言い、自分たちも「母親が郡長賞をもらったんだから、勉強しなくてはいけない、なまけてはいけない」と自分たちの頑張る基本、励ましになっていたという（舟地 2003：４巻 - ５、７巻 - １）。三郎氏の兄弟姉妹は小学校の時「品行方正、学力優秀、勤勉超衆につき一等賞を授与す」という賞状を皆もらっていた（舟地 1997：47）。三郎氏は、「小学校の時など少し勉強が出来ないと思う時は、母が郡長賞をもらったということであるから出来ないことはないと自らを励ましていた」（同書：47）。母の郡長賞は、三郎氏が勉強をする励みとなっていたといえる。

三郎氏が８歳のときに父が勤めるようになった広島県にある佐竹機械製鉄所は、母の姉の嫁ぎ先で、父は専務として働き、山本一家はその社宅で生活していた。三郎氏からみると、おばさん（母の姉）の１人息子は、社長の息子で金持ちの坊っちゃん、三郎氏の弟と同じ年の４つ下であったが、これに対し母は「お金がなくても、勲章をもらえばよい」と言っていた。三郎氏をはじめ兄弟姉妹は、母が喜ぶからと一生懸命勉強をした（舟地 2003：４巻 - ４）。このように母は、子どもたちが勉強熱心であることを誇りとして、また自分の子どもたちが勉強ができるのは当然であるとも考えていたようだ。

兄弟会で出てくる話は、「父親はこわかった、母親からは救われた」ということである。三郎氏の兄と弟に対するコンプレックスを克服する心の支えは、母の励ましの言葉であったようだ。男兄弟の中では、ぼくだけがおしゃべりで、父はそのしゃべることに苦虫をかみつぶしていたが、裏で母が「男もしゃべらんと損をする」と助け舟を出してくれた。ぼくがしゃべるのを聞いていて「三郎はやり手」と言うんです。自信を持ちました（舟地 1999：225 - 226）とも述べている。

(3) 兄 と 弟

三郎氏は次男で、兄弟姉妹は兄と弟３人、妹４人である。このうち、三郎氏の自伝にでてくる兄弟は、３つ年上の兄（長男）と４つ年下の弟（三男）で、常日頃から兄弟お互いに影響を与えた人物といえる。兄はすでに紹介したように、陸軍士官学校に合格した。三郎氏からみると、親の期待に添って軍人の道を歩みはじめた立派な兄だけに、兄へのコンプレックスも強まっていく。しかし、兄と自分（三郎氏）では、体格も性格も正反対だったという。成人した兄について、向こう意気が強く、年上の男とケンカしても負けぬほどで、軍人向き（舟地 2004：20）。私は身長162センチ。兄は183センチ。陸大を首席で出て、さっそうとしている。子どものころからきかん気で、おやじになぐられたら何日も家に帰って来ないが、私はおやじに出て行け、と言われたら、すぐに謝る（舟地 1999：225）。すぐ下の弟は、のちに仙台二高から東北帝大に進学する。この兄と弟に対するコンプレックスを三郎氏は感じ続けることになり、その克服が、三郎氏の大きなテーマとなっていったと考えられる。

(4) 家族経営の経営者としての資質形成

家族との一体感、兄と弟へのコンプレックス克服と母からの「三郎はやり手だから」という励ましの言葉、さらに軍人の子どもであるというプライドで、人まねをしない、独立独歩で、人のしていない、結果的に社会に貢献する仕事をするため、教育の道を究めるという態度の基礎が出来上がっていったといえる。私利私欲に走るのではなく、将来、障害児を教育するという、家族愛を基本とした温かい心で、しかも社会に対しては毅然とした態度で、社会のもつ矛盾に立ち向かっていったといえよう。

4．家族経営への志向

山本三郎氏の生まれ育った家族について考察し、生活史は20歳までを分析してきた。師範学校を卒業後、20歳で尋常高等小学校の教員になったが、22歳で師範学校の専攻科に入学している。師範学校本科の時とは全く違う専攻科での家族的な寄宿舎生活、および友だちである田中君のお父さんの教育方法にみられる家族的な雰囲気に心引かれているのを紹介し、少年期・青年期すでに、三郎氏が家族経営への志向をもっていたのではないかという仮説を提示して本稿のまとめとしたい。

(1) 寄宿舎生活

三郎氏の兄弟姉妹は皆、12歳になると親元を離れた。子どものころで印象に残っていることとして、母がシャツにボタンをつける、つけ方を三郎氏に教えながら涙を流していたことをあげているが、その当時は母がなぜ泣いているのかわからなかった。三郎氏は岩国中学校に入学して寄宿舎に入ったが5月ごろ、家に帰りたいとトイレの中で泣いていた（昴地 2003：4巻－2）。岩国中学校の寄宿舎には、地主や造酒屋のぼんぼんで、付き人でもいるような者が入っていて、桑畑から出てきていたことがあったが、それは桑畑にかくれて泣いていたのだ、という（同：7巻－8）。1日の日は皆、親に手紙を書く日で、三郎氏は返事が母から来るのだが、母からの手紙の中から1円札（今の1,000円札）が2枚落ちるので、涙がこぼれた、と言っている（同：4巻－2）。12歳で親元を離れ、寄宿舎生活の寂しさから、親に対する思いが強まったと考えられる。

陸軍幼年学校受験で不合格となり、父のすすめで進学した師範学校本科第一部では、16歳から20歳までをすごしている。「師範学校は全寮主義で、寄宿舎の構造も軍隊と同じで、起床から消灯まで総てラッパによる規則正しい4年間の生活」（昴地 1997：140）であった。三郎氏はこの生活に耐えかねて、親に辞めたいと願ったことがあった。このように、12歳から寄宿舎生活をして、軍隊的な規律正しい厳しさから、家族への思いを強めていったと考えられる。しかし軍隊生活が自分にあわないと感じながらも一方で、軍人である父のことは誇りであり、三郎氏自身の生きる指針であった。「師範学校に入学してからも、父が軍人であったということで同級生たちが尊敬に似た感じを持ってくれていたので私もその自覚で、変な人真似をしてはいけないと自分を律していたように思う」（同書：46）と述べている。

師範学校を卒業して、広島県の村立原田尋常高等小学校の先生を2年ほど勤めた後、1928（昭和3）年、22歳のときに広島師範学校専攻科に入学しているが、そこでの寄宿舎生活は、

これまで三郎氏が味わったものとは全く異なっていた。「専攻科生の寄宿舎は、本科生600人がラッパで起居する生活と違い、比治山の麓の蓮根畑の中にある30人ばかりの小ぢんまりした建物で、舎監の官舎と廊下で繋がっている家庭的な寄宿舎である。点呼もなければ消灯合図もない」(同書：140)。また別の本でも、次のように述べられている。「この寄宿舎は、ラッパで起居する１部生の軍隊式そのままの集団生活ではなく、生徒の居室と、廊下でつながった独立の家屋が舎監の先生の住宅になっていました。庭を掃除する先生の奥さんの白エプロン姿が見え、男のお子さんが長い廊下を走り回る温かい家庭的な雰囲気が漂っていました」(舟地 2004：29)。「30人ばかりの小ぢんまりした建物」「家庭的」といったものに、心引かれている。しかし同時に、「私の一生を貫いたものは、自分が軍人の子であるということ」であり、「人間は優越感がないと生きていけないものである。何か劣等感に陥ろうとした時、軍人の子である、しっかりしなきゃと自分で自分を励ます力になっていた」(舟地 1997：46) とあり、独立独歩で毅然とした態度で生きていく姿勢が読み取れる。兄と弟に対するコンプレックスを克服したいという気持ちが、つねに三郎氏を奮い立たせていたものと思われる。

(2) 田中さんの学園

専攻科の同級生の田中一郎君は自宅通学で、三郎氏は一郎君の家にたびたび遊びに行っていたが、一郎君の父、田中正雄さんが小学校長をやめて代用教員となり、広島市の長尾小学校に幼くして障害を受けた児童たちを集めいろんな自作教材をつくったりして、熱心に教育に取り組んでいる、その授業の様子を見学してすっかり感激し、友達を連れて見学に行ったこともあった、その田中正雄さんが1931（昭和６）年に、三篠町の農家を改造して、板張りの部屋をつくり、机を６脚並べて、６、７人の精神薄弱児を収容して、広島教育治療学園を設立した(舟地 1997：153、舟地 2004：36)。三郎氏が25歳のときである。しいのみ学園を創設するとき、この学園をモデルにしたとされているが、専攻科時代の22歳当時、三郎氏はこのような家庭的な雰囲気にもとづいた教育を志向していたといえよう。

おわりに

成人期へ移行し、就職をしてから自分の家庭をもつまでの生活史関連の資料には、家族の役割の中で、奥さんの内助の功について語られた部分がみられるようになる。三郎氏にとって家族とはどうあるべき、という意識が、成人期のいろんな人々との出会い、とくに影響を受けた先生方の夫妻をとおして形成されていく。本稿では、三郎氏の父、母、兄と弟から受けた影響と人格形成についてみてきたが、家族経営の源流として、さらに、三郎氏が成人期において自分の家族形成をどのように考えていったのか、見ていく必要があるだろう。

[文　献]

有賀喜左衛門　2000（初出1952）「日本の家」『有賀喜左衛門著作集Ⅶ［第二版］』未來社：261 - 319。
北川隆吉編　2000『有賀喜左衛門研究』東信堂。
三戸　公　1991ａ『家の論理１』文眞堂。
―――　1991ｂ『家の論理２』文眞堂。

坂口桂子　2004「非農林業における家族経営について」大分県立芸術文化短期大学研究紀要　第42号：47 - 58。
鈴木　広　1988「生活構造」本間康平・田野崎昭夫・光吉利之・塩原勉編『社会学概論［新版］』有斐閣：253 - 271。

［生活史関連資料］

社会福祉法人しいのみ学園　公式ホームページ2005　http://www.shiinomigakuen.com/
舟地三郎　1997『生涯現役　増補版』梓書院。
———　1999『小さきは小さきままに』梓書院。
———　2003　舟地三郎博士「声の図書館」ＣＤ全25巻　九州アジア記者クラブ。
———　2004『禍を転じて福と為す』西日本新聞社。
———　2005『ただいま100歳－今からでも遅くはない－』致知出版。